

# 「ウトロ」で出会う、分かち合いのエネルギー おひさま発電所とウトロ平和祈念館

京都府宇治市にあるウトロ地区は、戦争中、飛行場建設のために集められ、敗戦後「置き去りにされた」在日コリアンの住む集落だ。差別や困窮など相次ぐ苦難にあいながら人々の尊厳と暮らしを守りぬいてきた歴史がある。その歩みを伝え、人権と平和の大切さを発信しようと、2022年開館した「ウトロ平和祈念館」の屋上に、市民の手で太陽光パネルと蓄電池が設置された。戦争から生まれたまちだからこそ、戦争を引き起こすエネルギーの奪い合いには加担しない。そんな願いが込められている。

## 置き去りにされた人々

指さし「あそこまで続く巨大飛行場の滑走路を造るため、この土を掘り崩して運んだからです」

「周囲に比べ、ここが一段低いのはなぜだと思いますか？」。ウトロ平和祈念館（以下、祈念館）の事務局長、阿部糸りさんは、来館者をまず屋上に連れて行き、周囲を見渡しながらこの地区の由来を説明する。はるか遠くの地点を

指さし「あそこまで続く巨大飛行場の滑走路を造るため、この土を掘り崩して運んだからです」

1940年、京都飛行場建設が決まると、この地に朝鮮半島出身の人々が大量集められた。壁は杉板、屋根は杉皮、家とは名ばかりの劣悪な環境ながら、それでも敗戦までは賃金も配給もあった。だが戦後事態は一変する。日本人は消え仕事はなくなった。多くは帰



ウトロ平和祈念館の事務局長で、認定NPO法人「きょうとグリーンファンド」副理事長の阿部糸りさん。屋上から見渡せば、ウトロの歴史が目で見えてわかるという

国したが、経済的事情や病気などで帰国できない人は、住み続けるしかなかった。朝鮮戦争が始まると帰る場所を失った朝鮮の人々が他地域からも流

入するようになる。差別されることの多い日本社会で、同胞が支え合う場となったが、周囲からは異質な存在と見られた。生活環境改善など、公的対応は一切されず、排水設備もない低地で、豪雨のたびに畳の上まで水につかる厳しい暮らしが続いたという。

一方、国の事業だったはずなのにいつのまにか土地は民間企業に引き継がれていた。88年によってく上水道が敷設されたものの、直後には不法占拠として提訴され、歴史的背景や人権を顧みない最高裁判決で2000年、敗訴が確定。立ち退きを迫られる事態となった。苦境を脱することができたのは、住民と支援者たちの粘り強い活動による。日本の市民が「在日コリアンの問題は、在日日本社会の問題」と訴え、放置を続ける宇治市の責任を迫りして生活環境を改善

させる一方、支援の輪は海外にも広がった。同胞の困窮を知った韓国の市民団体の寄付と活動で韓国政府が動き、土地購入の目途がついたのは07年のことだった。こうした歴史を継承し、新たなまちづくりの交流拠点をつくらうと開館したのが祈念館だ。

## エネルギーと人権、平和

「祈念館ができれば屋上には太陽光パネルを設置したいと思っていました。それもグリーンファンドの仕組みで」。屋上で説明を終えた阿部さんは、足元の太陽光パネルを見ながらそう話す。

グリーンファンドとは、認定NPO法人「きょうとグリーンファンド」のこと。2000年設立以来、市民によびかけ寄付を募り、